

地域情報（県別）

【静岡】「あきらめない・断らない」小児医療の最後の砦として-坂本喜三郎・静岡県立こども病院院長に聞く◆Vol.1

日本の医療機関で初めてファシリティドッグを導入

2024年6月21日 (金)配信 m3.com地域版

全国で6番目に誕生した、小児専門病院である静岡県立こども病院（静岡市）。地方では数少ない小児専門の医療機関として地域医療を支え、その貢献から「静岡県の小児医療の最後の砦」とも称される。院長を務める坂本喜三郎氏に、同院の沿革、医療機関としての特徴を聞いた。（2024年4月26日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

国内6番目の小児専門病院として開設

——静岡県立こども病院の沿革について教えてください。

昭和40年代の日本では、大学の附属病院や一般病院が小児医療の中心を担っていました。他方欧米では小児専門の病院が成果を残していた。欧米にならい、日本でも高度な医療を担う小児専門の病院の設立が待たれていたのです。その先駆けとして1965年に開業したのが国立小児病院（現・国立成育医療センター）でした。静岡県もその流れにのり、1977年、国内では6番目の小児専門病院として当院が誕生しました。

当院は開業当初から一般の医療機関では対応困難な15歳以下の患者さんを主に受け入れる医療機関として機能しています。開業から50年弱、これまでにいろいろな変化がありました。2003年には内科病棟を刷新し、その4年後には周産期センターの入った外科病棟が追加、総合周産期母子医療センターにも認定されました。

また、当初は身体系のみに対応した医療機関でしたが、2009年には小児病院としては全国で3カ所しかない児童精神病棟が完成しました。現在は発達障害から治療後のPTSDまで、お子さんとご家族が抱える精神科領域の悩みにも応えています。

救急救命医療にも力を入れてきました。2010年には全国に4カ所ある小児救命救急センターに指定されました。2013年には24時間365日体制の小児救急センターも開設し、子供たちを断ることなく受け入れています。5年前には小児がん拠点病院にも選ばれました。現在は東海地方の小児がん拠点病院である名古屋大学附属病院と三重大学附属病院、そして12の連携病院と協力し、医療を提供しています。



坂本喜三郎氏

——医療機関としてはどのような特徴がありますか。

現在は外科病棟、児童精神科病棟合わせて279床、150人の所属医師、400人の看護師が日々患者さんを診ています。常設診療科・領域は34あります。うち内科領域だけで血液腫瘍、皮膚科、感染症まで11領域。外科領域も小児外科から、脳神経外科まで8領域がある。周産期センター、循環器センター、精神科、救急部門もあります。

静岡県全域をカバーしていますが、来院される患者さんの約5割は中部地域が占めます。東部地域が約3割、約1割は西部地域から、残りの1割は県外からです。対象となる患者さんは小児ではあるものの、高いレベルの3次医療も提供できています。ゆえに当院は「静岡県小児医療最後の砦」と自称しています。どの診療科でも目標として掲げているのは「あきらめない・断らない」ということです。

——小児の総合病院とも自称されていますね。

当院では他診療科の医師同士が手を取り合うことにより、それを実現しています。一例として私が10年ほど前に携わった新生児の先天性心疾患の症例をご紹介します。

子供がお母さんのお腹の中にいたときに高度肺静脈閉塞を伴う左心低形成症候群が見つかりました。適切な処置ができなければ、子供は生まれてから6時間後には命を落とす。そんな症例でした。生まれてから速やかに手術にとりかかれるよう、循環器の医師のみならず周産期の医師、新生児の医師。そして心臓外科の医師、みなで連携を取り準備を進めました。子どもが生まれたのは午前9時57分。8分後には人工呼吸管理が始まり、その10分後には臍静脈カテーテルを留置、生まれてから50分後には手術を始めることができました。手術は1時間ほどで終わり、その子は今も無事に暮らしています。

入院病棟には院内学級もあります。当院は「全てのこどもとその家族のために安心・安全の医療を」という理念を掲げてきました。今後はそれに加えて、子供たちのより良い未来づくり、そして社会づくりに貢献することをパーパスとして挙げていきたいと考えています。その上で質の高い医療とケアを提供、先進的な医療を実践し、国内外に情報発信を続け、さらには教育体制を重視し、人材育成に努めることを行動目標に医療を提供していきたい。これが当院の方向性です。

——「静岡県立こども病院でないと診ることができない」という症例也多そうです。

静岡県、中部地域の産科で体重1000グラム以下の子供を診られるのは、現状当院の周産期センターだけです。他の東部・西部の医療機関とも連携を取りながら、治療を進めています。中には500グラム以下の子供が運ばれてくることもありますね。

また、静岡県内で外科的な治療を赤ちゃんに対して行う必要がある場合も、ほとんど当院で対応しています。新生児の先生のみならず、新生児に対応できる腹部・呼吸器外科、心臓外科、整形外科、そして麻酔科などあらゆる分野に特化した先生が当院にはいるからです。

特に私の専門でもある循環器の領域では国立循環器病センター（大阪府吹田市）と同程度のスタッフを集めて治療に当たっています。小児の循環器カテーテル治療においては全国でも3本の指に入るのではないかと自負しています。

——医療機器にもこだわりがありますね。

例えば循環器の領域では2年ほど前に新しいハイブリット血管撮影室を作りました。それと同時にCTも最新の小児対応可能なものを導入しています。2011年の東日本大震災後、福島県などを対象として、小児の放射線被ばくに関するデータが徐々に集まってきています。その中で、長い人生の中で、被ばくの影響が出てくる可能性を示唆するものも診られるようになりました。

当院に限らず、小児科医は子供の放射線被ばくに非常に敏感になっています。特に当院で診る子供たちは検査を受ける機会が多く、被ばくの問題が避けられない。ゆえに、被ばくの可能性のある医療機器は最新のものを導入するようにしています。

——小児のがん治療にも力を入れています。

現在全国には15の小児がん拠点病院がありますが、地方の公立病院で選ばれたのは当院だけです。人材の確保などが難しかったですが、治療も当然のことながら、人生設計の面でも手助けができるよう静岡県にかけ合いました。

例えば、高校は義務教育ではないため、学校によって対応は異なるものの、基本的には闘病しながら院内学級などで学習しても単位認定は難しいという課題があります。そこで県の教育委員会と連携し、オンライン授業に参加すると出席扱いになるように調整を進めました。そして、ついにがんと闘いながら高校を卒業できるような体制を構築しました。

児童精神病棟を設置するなど心のケアにも尽力

——精神科の入院病棟があるなど心のケアにも力を入れています。

精神科の体制は常勤医師5人、常勤心理士6人、看護師23人です。発達障害については、当院は2人体制で診ています。また栄養管理室もあり、栄養障害への対応もできます。拒食症など心と体両面でのケアが必要な疾患にも十全に対応できるようにしています。

また、当院は病院全体が子供の領域に特化しているため、精神の不調があったときにも「こども病院に行ってくるから」で済ますことができ、無用な詮索などを受けることがありません。そのため精神科の通院の敷居が低いと考えています。

——本当に幅広く、子供たちが抱える病、本人とその家族が抱える悩みに向き合っているのですね。

小児外科や脳神経外科、腎臓内科、麻酔科などもあり、各診療科で先進的な医療を展開しています。例えば、側弯症など背骨の問題にも対応しています。2019年には、東海地域で初めて頭蓋顔面（クラニオフェイシャル）センターを開設しました。頭蓋顔面は臓器・器官が複雑に存在する領域です。口唇口蓋裂や耳介変形など顔面の変形をきたす疾患、気道狭窄の原因ともなる小下顎症といった頭部の形態を治療するには、多領域で協力し診療に当たる必要があります。当院では形成外科に限らず、耳鼻咽喉科、小児外科、リハビリテーション科など関連各診療科が分野横断的に力を合わせ継続的なチーム医療を提供しています。

加えて、当院には豊かな子供の療育環境を作るため、保育士、チャイルドライフスペシャリストも在籍。病気と闘う子供たちに全人的な医療を提供するために、病気そのものだけでなく、体と心両面にまたがる課題にも同時に対応

しています。

——院内には、施設犬（ファシリティドッグ）もいます。

当院は2010年、日本の医療機関で初めてファシリティドッグを導入しました。初代ファシリティドッグはベイリー（2020年に死去）というゴールデンレトリバーでした。現在は「タイ」というゴールデンレトリバーが子供たちのケアにあたっています。タイも当院の大切なスタッフです。実際に一緒に働く看護師「ハンドラー」とともに、当院で雇用しています。

実はベイリーの代で一度「ファシリティドッグの導入をこれからも続けるべきか」という議論が院内でありました。そんなとき当院にいた子供たちから「ベイリーをずっとここにいさせてほしい」と直訴され、現在もファシリティドッグを継続する基盤概念となっています。

実際にファシリティドッグがそばにいるからおとなしく採血を受けるという子供もいます。そうなれば、鎮静剤はいりませんし看護師やお父さん、お母さんが子供の手を抑える必要もなくなる。ファシリティドッグは緩和ケアの現場でも活躍しており「亡くなる直前までそばにいてほしい」と言われたこともありました。

それほど、ファシリティドッグがいることは重要なのです。現場では、病棟ラウンドや、採血検査時の同席、安静が必要な子供の添い寝といった形で活躍してもらっています。

◆坂本 喜三郎（さかもと・きさぶろう）氏

1985年、京都大学医学部を卒業。1987年から静岡県立こども病院で勤務。1997年には仏ストラスブールとパリに留学し、先天性心疾患の手術を学ぶ。静岡県立こども病院心臓血管外科部長などを経て、2017年に院長に就任。

【取材・文＝小林空】（写真は本人提供）

記事検索

ニュース・医療維新を検索

